●シリーズ●わがまちの文化財〈41〉

町指定重要文化財　須恵器（鶴首古墳出土）

昭和45年4月1日指定

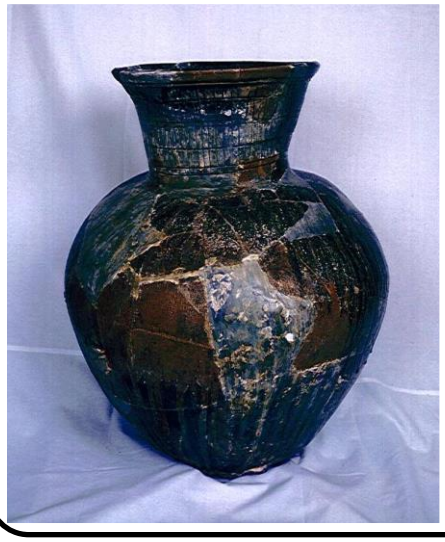
鶴首古墳は、竪穴式二重石室をもった古墳時代中期の円墳で、石室の底に土器（須恵器）の破片が敷きつめてありました。この破片を集めて復元したのが写真の須恵器の大甕です。復元後の寸法は、高さ62㎝、最大幅52㎝あります。

また、登り窯を使用し密閉した空間の中で酸素欠乏状態による還元焔焼炎（かんげんえんしょうえん）により、アルカリ性色の青灰色となるのが須恵器の特徴です。

土器の肩のあたりの緑がかったウワ薬状のものが流れているが、これは燃料として使われた薪などの灰が土器にふりかかり、それが高熱によって釉薬（ゆうやく）化（ガラス質化）したものと思われます。いわゆる「自然釉」がみられるもので、鶴首古墳出土の須恵器には見事な自然釉が流れています。

大甕は、水や穀物の貯蔵用のものを、副葬品として再利用し床に敷きつめ、木棺の排水用にしたものと考えられ、こうした風習は山陰各地の古墳でみられるものです。これらのことから、この古墳は山陰地域の墓制の影響を受けた豪族の墓であることを物語っています。

せらにし郷土民俗資料館所蔵



●シリーズ●わがまちの文化財〈42〉

町指定重要文化財　積善寺古墳脇出土須恵器（しゃくぜんじこふんわきしゅつどすえき）

昭和59年5月15日指定

積善寺古墳脇から昭和58年（一九八三）7月、宇津戸郷土史研究会員により発見されたもので、大甕3個・横瓶2個・はそう1個・つまみのある杯蓋1個、の計7点があります。大型のかめが1か所から3個も発見されたのは町内では珍しいことでした。

これらの須恵器は、当時、積善寺周辺の公園化のために、古墳脇の山脇側の真砂土がブルドーザーによってけずられた際に発見されたもので、須恵器各種は、古墳に葬られた墓の主の埋葬供養（殯（もがり））のために用いられた後、古墳脇に破却埋納されたものと推定されています。

世羅町大田庄歴史館に展示

※殯とは、人が亡くなってから一定期間、埋葬場所以外で遺体をいったん安置し、死者の復活を願いつつ「死」を確認すること。